

奈良市眺望景観保全活用計画プレイベント ～故郷の景色を守る～
「眺望景観保全活用計画を知ろう」
議 事 録

1. 日 時：2011年9月10日（土）13:30～16:30

2. 場 所：奈良市中部公民館 第4講座室

3. 次 第：

（1）講演：「奈良の眺望景観」

講師 奈良女子大学 教授 増井 正哉

（2）パネルディスカッション：「奈良市眺望景観保全活用計画について」

【コーディネーター】増井 正哉（奈良女子大学 教授）

【パネリスト】室 雅博（奈良まちづくりセンター 理事長）

上嶋 晴久（建築家）

宮前 洋一（株式会社スペースビジョン研究所 代表取締役）

仲谷 裕巳（奈良市景観課 課長）

4. 議事概要

（1）開会

仲 谷 課 長：開会に先立ち、先日の豪雨によりお亡くなりになった方のご冥福をお祈りする。

奈良市の景観は、豊かな自然環境や歴史的な建造物が相まって作りだされているだけでなく、さらに、伝統行事や産業など、人間の営みが合わさり素晴らしい景観を形成している。昔の人たちが受け継いできた素晴らしい景観を守り育てていくため、奈良市は眺望景観保全活用計画を策定することとした。

本日のプレ講座は、奈良市眺望計画保全活用計画策定に向けた取り組みを広く知っていただくことを目的に開催することとなった。「故郷の景色を守る」というサブタイトルのとおり、奈良市の景観は、未来の方にとっても故郷と感じられる景観であると考えている。本日は、より良い景観づくりへ向けて活発なご議論を宜しく願いたい。

（2）講演：「奈良の眺望景観」

増 井 教 授：奈良市は、大阪大学鳴海名誉教授を座長に眺望景観の保全活用について検討を始め、今年度で3年目になる。私も検討に参加させていただいており、現地調査や作業に携わるなかで眺望景観についての知識が深まったと感じている。

本日のプレ講座を皮切りに、10月には3週連続で眺望計画に関する市民講座が開催される。このような形で眺望景観の保全活用について理解や検討を深めるよう努力している自治体は全国的にも少ないと思うので、是非ご参加いただきたい。

今回の講演のお話をいただいた際に、奈良市の眺望景観は観光業者や利用者にどうイ

メージされているのかをホームページなどで簡単に調べてみたところ、眺望景観を撮った写真を載せている観光ホームページや観光ガイドブックは少ないことがわかった。

奈良の景観をPRする上で、眺望景観の魅力をあまり意識してこなかったからではないか。対照的に、フィレンツェでは、町を紹介する際に必ずといっていいほどミケランジェロの丘から望む市街地の写真が使われる。その風景はまさに眺望景観であるし、眺望ということがすごく大切にされていることが伺える。ニューヨークも同様に、マンハッタンを紹介する際にお決まりの眺望景観の写真がよく利用される。

昨年3月にあるNPOの会合に招かれた際に、1930年代のニューヨークの写真展が開催されていた。その写真展でメインになっていた写真は、摩天楼が建ち始めた風景を引いて撮った写真であった。その他は、生活景と言える町の人たちの暮らしを撮った写真が多く、眺望景観と生活景という二極の風景を撮った写真が展示されていたことが大変興味深かった。

入江泰吉氏が撮影した写真からも見て取れるように、奈良市にも誇るべき眺望景観がある。海外で景観に関するコンサルタント業務に携わっている友人と先日夕食をした際に、仕事を始めたきっかけは二月堂から望む景観だったという話を聞いた。彼は、「国内で町の歴史的な枠組みや形を一望でき一目で理解できる眺望を望める場所は、二月堂だけである。この風景に衝撃を受け、今も景観に関する仕事に携わっている。」と語っていた。それぐらいに奈良市の眺望景観はインパクトがある。

奈良市は景観計画を策定し、薬師寺周辺を中心に景観形成に取り組んできた。一方で、眺望景観についてはそれほど重視されてこなかったと思う。また、山の辺の道のように様々な風景が展開されていくことを「シークエンス」や「連続景観」と表現するが、そのような風景も奈良では上手に宣伝されてこなかった。観光パンフレットも同様に、スポットごとの紹介は良くされているが、その地域全体でどんな風景が展開されるかはあまり紹介されてこなかった。逆に、紹介しなくても見る側が自然と感じられるほど多様な風景が展開されるということが奈良の凄みなのかもしれない。

滋賀県のある地域で保存地区指定に向けた町並みの調査に携わっている。そこでは地域の名所を紹介するマップをつくっており、そのマップにはさりげなく「帰省した親子が遊ぶ砂浜」や「漁師が網のつくろいをする場所」など生活の風景が散りばめられている。全国的に生活の風景を地域で大切にしていこうという傾向があるが、奈良は持っているものが凄過ぎるため生活景が見えてこない。しかしながら、奈良を訪れる観光客は奈良の連続景観や生活景を期待し、楽しんでいる面もある。

大池池畔から薬師寺東塔と西塔の間に東大寺大仏殿を望むことができる代表的な眺望景観がある。大池を訪れ大仏殿を望むと実際には小さく見ることは難しいが、歴史的、景観的にも重要な大仏殿を感じ、探すことは大切なことである。青春時代を京都で過ごした人が京都タワーを見るとその時代を思い起こすように、モニュメントは心象風景を構成する重要な要素である。しょうもないモニュメントであっても心象風景になることが恐ろしいことである。しかし、奈良ではモニュメントとして若草山、東大寺大仏殿や薬師寺を確認できることは素晴らしいことだ。しょうもないモニュメントを確認して故郷を感じるのではなく、東大寺大仏殿などの伝統的なモニュメントを望み

故郷を感じ感動するということが大切なのである。このことが奈良の眺望景観の特徴だと考えている。

奈良市は、アンケート等を通じ、実に様々な奈良らしい眺望景観が選定した。東大寺大仏殿や猿沢池、最近脚光をあびている大仏池池畔からの東大寺大仏殿への眺望などが選ばれていることは、なるほどと感じるが、都祁野盆地・都祁野岳への眺望と月瀬梅林や追分梅林の眺望が選ばれたことは意外であった。選ばれた眺望景観の特徴として、モニュメントを主体とした風景、モニュメントと周辺の風景が一体となった風景、大和青垣などの自然とモニュメントと麓の波がセットになった風景、モニュメントを池越しに見るなど見方に凝った風景、町並みとモニュメントがセットになった風景が挙げられると思う。

今までの話をとりまとめると、眺望景観は大きな要素の枠組みと個々の要素の関係性を整理できるツールとなりうる。奈良の場合は、大和青垣とモニュメントが眺望景観の重要な要素であるし、現に奈良らしい眺望景観に選定されたものの多くはそのような景観である。但し、眺望景観をつくりだしているものはその要素だけではなく、眺望景観をどのように活かし保存していくかである。

奈良町が都市景観形成地域に指定され様々な景観コントロールが行われているように、景観形成に向けた既存の取り組みがある。また、平城宮跡が歴史的風土として担保されているように都市計画上の規制がある。私たちが良いと感じている眺望景観は、都市的な様々な規制や誘導の成果として現状が保たれており、眺望景観保全活用計画は既存の法規制を踏まえた検討が必要になる。

入江氏が昭和 31 年に元興寺の前の通りから興福寺を望んだ風景を撮った写真がある。その写真と現在の町並みを比較すると、現在の町並みは建物が建て詰まり、不調和な建物が多いなどということは多くの方が感じられることである。勿論、景観上の問題が語られ、取り組みが行われてきたが、“眺める”という切り口から景観を考えたときには別の視点が新たに必要になってくる。電線が地中化され町並みがすっきりしたが、眺望という視点から見ればモニュメントとなる興福寺の五重塔がもう少し見えるようにしたほうが良いということも言えるようになる。建物の高さや空の広がりなど、様々なことを考えることもできるかもしれない。

今までは、個々の建物のデザインや形態だけで話をしてきたが、それを高いところから眺めた際に「もう少し改善したほうがいい。」とか「この建物は景観に調和している。」という議論ができるようになる。眺望という考え方を共有することによって、課題を再確認できたり、あるいは、新たにコントロールしたほうが良いという視点も出てくると思う。

講座の全体テーマは、眺望景観の保存活用である。眺望景観という視点から議論することの最大のメリットは“わかりやすい”ということである。奈良市が、奈良町を都市景観形成地域に指定し、奈良に調和した色彩や形態という視点から景観形成に取り組んできたなかで、様々な理解や見方があり、難しいこともあった。しかし、二月堂からの眺望景観がどうなってもいいと考える人は恐らくいないと思う。素晴らしい眺望景観は、市民や旅行者など、様々な立場の方にも共感・共有できるものであると思う。実際にまちづくりに取り組んでいる方にとって、みんなで景観の方向性を共有す

ることは非常に難しい。眺望景観という視点から議論したときに細かい意見は出てくるかもしれないが、共有すべき景観の目標設定には役に立つ。個々の景観形成施策では理解を得られ難かったことが、眺望景観という大きな目標設定や価値観に照らし合わせた際に理解を得られ、個別の問題も解決されてくると思う。眺望景観保全活用計画には、そのような効果を期待したい。ただ、高さや色彩のコントロールなど、個々の景観施策に結局立ち戻ることになるが。

入江氏の作品には、東大寺大仏殿や春日大社本殿など、モニュメントのみを紹介した写真は1カットも無い。対象物に寄って撮影しているか、眺望景観を撮影されているかどうかである。それは彼なりに奈良の価値として眺望が重要であるということを感じていたからであるし、強調したかったからではなかろうか。その反面、観光パンフレットなどに眺望景観が取り上げられていないのは、もしかすると入江氏が撮影したような風景はもう望めないからかもしれない。残念ながらフィレンツェのように代表的な眺望景観が無いのかもしれない。入江氏が撮影した当時の風景に戻る必要はないが、現在のような眺望景観になぜなっているかを吟味していくなかで、入江氏の写真は参考になるのではないかと思う。

(3) パネルディスカッション：「奈良市眺望景観保全活用計画について」

資料説明

徳岡係長：奈良市眺望景観保全活用計画（素案）の概要を説明させていただく。

—— 資料説明(略) ——

パネルディスカッション

増井教授：説明いただいた素案を踏まえ、パネルディスカッションを始めたい。

素案では、8頁の保全活用の目標や基本方針に基づき、奈良らしい眺望景観から12件の重要眺望景観候補を選定している。「奈良らしい眺望景観とは」ということからスタートし、具体的に保全活用を進めていく上で必要な条件や候補をとりまとめた2部構成となっている。

パネルディスカッションでは、まず、奈良らしい眺望景観について議論していただいた後に、重要眺望景観候補を絞り込む際に重視すべき視点や活用に向けたアイデア出しをしていきたい。

最初に、仲谷課長から奈良市はどのように39件の奈良らしい眺望景観を選び、今後どのように保全活用していきたいと考えているかを説明いただきたい。

仲谷課長：当初は奈良のすばらしい眺望景観という視点から選定しようと考えていた。選定を進めるうちに様々な眺望景観が挙げられ、その中には眺望景観としてはすばらしい景観ではあるが奈良らしさを感じられないものもあった。そこで特に奈良らしさを感じるということを重視して選定した。

奈良市は平成20年度より「奈良を感じるすばらしい眺め」と題しホームページ等で眺望景観を募集し、また、既存資料等の収集・整理、現地調査を実施してきた。その結果、117件の候補をピックアップした。そこから、眺望景観の重複・類似状況や眺望景観のとらえ方への適合状況を踏まえ、奈良らしい眺望景観の第1次選定候補として39

件を抽出したところである。今後も、更なる意見収集に努め、眺望景観選定候補や重要眺望景観候補を増やし、本当に奈良らしい眺望景観を選定していきたいと考えている。

増井教授：奈良らしい眺望景観は、アンケート調査を実施し、様々な立場の方の意見を聞くとともに、既存資料の整理等により選定されたとのことである。第1次選定候補であるため、今後増えることも十分考えられる。

仲谷課長からは、奈良らしい眺望景観とは「奈良を感じるすばらしい眺め」であるとの説明があったが、パネリストの皆さまはどのようにお考えか。

室 氏：眺望景観についてお答えする前に、その前提について話をしたい。なによりも、住民自身が「奈良はどこを訪れてもすばらしい景観がある。」と感じ、観光客にも同じように感じてもらえるよう奈良の景観を底上げする必要がある。その1つの取り組みとして、みんなで眺望を良くしていこうということでないかと広がりが無い。

「初夏に咲く蓮の花」という言葉があり、その風景は確かに美しい。それは人間がその風景を美しいと感じるからこそ美しいのである。その感性を持ち続ける重要性を指摘したい。例えば、乳母車に乗った赤ちゃんが道で犬とすれ違ったときに、怖いと思うか、可愛いと思うかは、人それぞれだろう。様々な経験を積み重ね、感性が高まり、アイデンティティや原風景を形成していく。このことをお互いに認識して取り組んでいく必要がある。

増井教授：室さんは景観の底上げが重要だと指摘された。景観というどうしても目に見えるものに注目しがちであるが、眺望景観は個々のすばらしい景観の上に成り立っていること、また、その景観は、建物の履歴や町の歴史など、様々な要素が折り重なって形成されていることを再認識してほしいという意見であったと思う。

上 嶋 氏：奈良らしい景観を建築家の立場から答えることは非常に難しい。

まず、建築家とは何かということについてお話したい。建築家と建築士があるが、建築士は資格である。建築士の資格を持っている方は、住宅メーカーの設計、営業、教員など様々な立場の方がいる。建築家は人生の生き様そのものであると私は考えている。人生で自分は建築に携わり、文化に関わり、後世に引き継がれ、後世の人に後ろ指をさされないような建築文化を残していきたいと考えている人が建築家である。建築家と建築士を一緒にしてはならないことを前提にして考えていきたい。

建築家協会とは、同じような生き様を持ちたいと考えている人たちの集団である。約20年前、建築家協会は、奈良市が都市景観形成地域を指定した際に奈良町センターでシンポジウムを開催した。反響が良く、600人程度の参加者があった。世界遺産登録などが控えていたこともあり、シンポジウムのテーマ「奈良の建築景観はどうあるべきか」は大変センセーショナルに感じられた。建築景観が注目された時代でもあった。建築家は地域の景観に対して大きな責任を担っている。建築家など、ものづくりの人間が、すばらしい景観をつくりだせるかどうかの水際に立っている。建物をどのようにつくるかで、景観のニュアンスが変わる。

素案では、奈良らしい眺望景観を6タイプに区分されている。

まず、見下ろし型の広い景観を対象とした眺望景観には、建築物はそれほど関係はないのかもしれない。韓国の歴史的な町並みに住まわれている方を案内した際に、「奈良

には高層ビルがないので安心した。」といわれた。見下ろし型眺望景觀に、背の高い建築物は影響があるが、小さな建築物はそれほど影響がない。

見下ろし型以外の眺望景觀のタイプでは、建築物が大きく関わってくる。しかし、残念なことに、奈良らしい眺望景觀一覧に選定されたものには、町並み景觀と一体となった景觀はあまり選ばれていない。

奈良らしい景觀は、「どこからでも大和青垣など山の稜線を望めることが特徴だ。」といわれた先生もいたが、万葉集や和歌にしても自然を関連づけて自分の思いを詠っている。奈良らしいというと、自然とモニュメントが中心にならざるを得ないということをも奈良らしい眺望景觀の一覧から感じた。

増井教授：建築家の立場をご説明いただき、建築家の力を発揮できる眺望景觀が少ないことが残念だというお話であった。逆に、建築家が建築士かわからないが、ご活躍になった結果、これだけしか残らなかったということかもしれない。

次に、ランドスケープデザイナーあるいは都市計画家として全国の景觀計画や文化的景觀に携わっている宮前さんから奈良らしい景觀について意見をいただきたい。

宮前氏：奈良市の眺望景觀保全活用計画に関するお話をいただいた当初は、なぜ市が眺望景觀に着目したのか、施策上どのように位置づけられるのかについて悩んだ。そこで、前年度作業で挙げられた眺望景觀を材料に、奈良の眺望景觀を良くするにはどうしたら良いか、あるいは、行政と市民が一緒になって眺望景觀を守り育てていくにはどうしたら良いかから作業に取り掛かった。

眺望景觀は、見通しが重要である。景觀計画では一定のコミュニティの中でお互いの利害を調整していくわけであるが、眺望景觀となると見る側と見られる側が離れているためお互いに顔を合わせたことがない場合も多い。また、物理的な線があるわけではないので、生駒市や大和郡山市等の他市町村からも見られることとなる。眺望景觀を切り口に従来の景觀計画に新たなフィルターを設けて、広域に、または様々な立場から検討することに面白みがあると感じている。その一方で、市民、観光客、行政等、様々な立場の方が感じる奈良らしさをどう整理するのかに頭を悩ませた。

眺望なので見えなければならぬことは前提であるが、見る側と見られる側の間に様々な要素があり、そのなかで、奈良の眺望景觀は、特定の場所から特定のものだけが見えれば良いというわけではないことが特徴であると感じた。

京都市や金沢市など、眺望景觀を切り口に取り組みを進めている自治体がある。それらは視点場を固定し、そこから邪魔なものが見えなければいいという考え方である。しかし、仮に視対象が見えなくても良いのではないかと。色々な歴史や物語があるなかで、たとえ見えなくてもそれを感じることができる蓄積がある場所が奈良である。懇談会では、あるおばあさんが、「興福寺南円堂の鐘がなると脳裏にその風景が思い浮かべられる。」という話があると聞いた。そのような資質をもっているのは奈良だけではないだろうか。奈良らしい景觀の成り立ちのひとつとしてあげている「心で感じる景觀」とは、目に見えずとも物語や文化の蓄積から感じられることが奈良の特色であるという考えからである。

一方、「情報としての景觀」は、東大寺大仏殿など奈良らしさとして象徴化され、共有されることが多い景觀イメージのことをさしている。国民全体の共通の財産として位

置づけ大切にしていける必要がある。

奈良らしい眺望景観として「目に見える景観」「心で感じる景観」「情報としての景観」の3点から整理はしたが、心で感じる事ができたとしても見る事が出来なければ眺望景観として不十分だという課題もある。また、Discover Japanなどの観光の取り組みを通じて、奈良らしい眺望景観として意識にすり込まれているイメージもある。すり込まれた景観を美しいと感じることは危うい。快適さや美しさを本当に感じられる眺望景観は何かを念頭に置きながら、これからも作業を進めていきたい。

眺望景観の保全活用に向けて、具体的に施策として何を展開していくかということになるとなかなか難しい。しかし、眺望という切り口は面白いので、市民講座などを通じ市民や行政など多様な立場の方と広がりを持って検討を進めていきたい。

最後に、眺望景観はモニュメントと一体となった農地や森林など、その周辺環境も関係してくる。景観課だけではなく農林部局や土木部局など、行政間においても他部局と連携しながら広がりのある取り組みを進めていただきたい。

増井教授：宮前さんは、眺望景観保全活用計画の計画づくりのコンサルティングをされており、色々な情報を集められ、資料を作成されているので、率直な意見をお聞かせください。

奈良ならではの眺望景観のとらえ方があるだろうという考えのもとに作業を進められたということは印象的であった。京都の場合は、東山が見える範囲はこのくらいなので建物の高さはこのくらいに下げなければならないという、ある意味分かり易いように構成されているが、奈良の場合はそれでは済まないという考えから、5頁に掲げている奈良らしい景観のとらえ方をご提案いただいたのだと思う。

物語や伝説や平城京のグリッドが見えてくるというのは奈良しかないものであるが、その反面、ある意味ステレオタイプ化してしまい、これさえやっておけば奈良らしいということになってしまわないかという懸念もされていた。

広がりが必要というなかで、地域的な広がりに加え、周囲の皆さんとこのような勉強会をしながら進めなければならないということ、また、行政の部局間の連携が必要であるということまでご指摘いただいた。

時間があるので会場から意見を伺いたい。

会場：私が学生の頃京都で下宿をしていたが、その際に夜まで飲んで歩いて下宿まで帰っていた。烏丸通を北に向かって歩いていた時、前を見上げると真正面に北極星が見え、びっくりし、感激した。平安京をつくった人たちは、当時からこの北極星を見て北を悟ったのかと思い、歴史や歴史遺産と自然との関係を感じた。その話と直接繋がるかわからないが、自然の現象や移ろっていく自然の景色と眺望というものがセットになった時に感動を与えるのかと思う。江戸時代に奈良八景があり、佐保川に蜚、猿沢池に月などがあるが、このようにセットで眺望が評価されても良いのではないかと思った。15頁に大宮橋から若草山への眺望の写真が掲載されており、佐保川の桜が満開であるが、これも桜の花がなければ特に取り上げるほどではないのかもしれない。

増井教授：景観と自然の関係について実体験を交えてご意見いただいた。また、奈良八景も確かにそうであり、人文的なものと自然との調和の重要性についてご指摘いただいた。

宮前さんが先ほど関連部局との連携で、農林部局にも入って頑張ってもらわないと困

るという話をされていたが、それは田園のなかにも人の営みが生き生きとしていてはじめて眺望景観が成り立つということであり、関連することかもしれない。

会場：平城宮跡から東を見る景観があげられるが、どの場所から見るかで異なったものとなる。最も障害物がなく、きれいに見えるのは第二次大極殿の基壇の上からの眺望である。平城宮跡は同じように書かれるが、ある一点からみると全く異なる。そのあたりを抽出することも大切であると思う。

若草山の頂上からの景観は、西側の生駒山を見るのが殆どであるが、三重目の南側あたりから御蓋山の円錐形が美しく見え、その向こうには奈良盆地が見える。また、左手方向には春日山が連なる。取り上げられることは少ないが、良い眺望である。

増井教授：視点場のなかでも、さらに細かい部分まで教えていただいた。奈良を案内されているなかで、最もお勧めの眺望景観はどれか。

会場：いつも案内しているなかでいうと、先ほど述べた第二次大極殿の基壇の上からの東側への眺望である。最も障害物が少なく見える。平城宮跡でももう少し後へさがると広く見えるが、植木などの障害物が多くなる。基壇の一部を足下に見ながら、それを含めて東側を見るという構図が良い。

増井教授：奈良らしい景観のとらえ方について、補足されたいことがあればご意見いただきたい。

室氏：奈良の都は三方を山に囲まれて南に広がるという中国の都を見習ってつくられた。先ほどご紹介された基壇の上に立つと、1300年前にはこんな空間だったのかということを感じられる。大極殿からの四方八方を何とか取り上げられないかと思ったが、書きようがなかった。平城宮跡から東の山を見た眺望というのがあるから、まあ良いかということにしている。

昨年、仲川市長があるフォーラムで、奈良は高い建築物がないので、四季折々大きな空の表情を見ることができるという表現をされた。同じことを言われていると感じた。奈良は良い財産をもっているのもっと大切にしていきたいと思う。

増井教授：奈良の財産といわれたが、数多くの眺望景観をリストアップするなかで、奈良の財産を再認識する作業ができているのではないかと思う。

上嶋氏：眺望景観では遠景が主であるが、建築に関しては近景、中景が主となる。例えば、アイストップにこの建物がなくなったら終わりというような町並みもあり、重要ではあるが、個人の財産でもあるので、法的にどうするかは難しい問題である。

建築家の話に戻るが、仮に奈良町に変なビルができることがあった場合、その評価をどうするか。近景や遠景という意味合いのなかで存在する以上、その建物は評価され続けなければならない。一旦出来てしまい、10年経てばいくらへんなものでも目に入ってこなくなるのが人間である。元興寺の筋向いの女子寮でもそうである。ある時点で建築家やクライアントが、この町はこうであるということを勝手に解釈して建ててしまう。クライアントが奈良町に鉄筋コンクリートばかりやっている建築家を呼べば、その建築家は努力して鉄筋コンクリートを建てようとする。ログハウスばかりやっている建築家を呼べば、その建築家は努力してログハウスを建てようとする。根本的には、クライアントが建築家の選定を間違っており、クライアントが一番悪いのだと思う。クライアントの資質の向上が必要であると思う。このような勉強会をもとに、市民が奈良の文化を自分達が守るという方向に進まなければ、徐々に変化していったし

まう。

増井教授：市民全体で景観を考えていかなければならないという意見だと思う。

時間の関係もあるので、重要眺望景観の議論に移りたい。

重要眺望景観は、奈良らしい眺望景観候補 39 件のなかから、今後具体的に保全活用を考えていくための絞込みをされたものである。どのように絞込みをされたのかを補足いただきたい。

仲谷課長：13 頁に示すように、横軸に奈良らしさ、縦軸に課題の量とした図の上に候補 39 件をのせてみた。各々の評価の方法を下に示している。概ね右上に行くほど奈良らしく課題の多い眺望景観となっており、奈良市としてはこのあたりを中心的に重要眺望景観に選定し、保全活用に取り組んでいきたいと考えている。現在は 12 件を重要眺望景観候補としてあげているが、確定したものではない。次の段階としては、これらの候補の保全及び活用、再生の方法を作成していきたい。現在、行政が高さや風致、建蔽率や容積率などのルールを決めて従っていただいているが、それに眺望的な視点からのルールを付け加えていきたいと考えている。

増井教授：美しいものだけではなく、課題のある眺望も候補としてあげられており、今後、具体的な施策も検討しなければならない。

作業された立場から、宮前さんに意見をいただきたい。

宮前氏：一般的には、保全計画という良いところだけを残すということになりがちである。課題は解決しようという意図があるから課題として見えるものである。今回両軸で分析してみると少しは進歩したかと思う。一般的には自然風景計画や歴史的な街区の保存計画、文化財の保護などでは、これだけは守れば良いというお宝主義になりがちである。しかし、見ていただいたら分かるように、今回は、確かに象徴的なものに加え結構普遍的なものも選ばれている。

もうひとつは自然風景が多く出てきていることが特徴としてある。緑視率の高いものが多い。おそらくこれが奈良の特徴ではないかと思う。古都法が制定された当初から奈良は古都として歴史的風土の保存が図られてきており、歴史的文化的な資産とそれを取り巻く周辺の自然環境が一体となって歴史的風土を醸し出しているということが、国として奈良に対して施策を講じる第一義的な理由である。それを踏み外すことはできないなかで、眺望景観保全活用計画が立てられることは極めて興味深いことであると思う。

増井教授：奈良の歴史的風土がここに反映されているということが良く分かる。そのなかで、なかには、どうしてもない課題もあるため、課題抽出にあたっては、解決できる範囲での課題を考えていき、行政や市民、専門家等の力で何とかできるだろうという眺望景観が重要眺望景観候補として抽出されていることがポイントであると思う。

重要眺望景観候補 12 件について室さんに意見を伺いたい。

室氏：39 件をそれぞれ採点して、プロットするとこのようになるのかと思う。しかし何か漏れ落ちているのではないかと懸念している。皆さんの力で増やしていただければと思う。

No.17 の眺望景観の視点場である JR 奈良駅から三条通は、本来は神聖な道である。しかし、現在は色々な店構えと看板で神聖さが感じられないものとなっている。

奈良町を南北に分ける奈良の歴史的にも重要な道であるので、時間をかけてでも良くしていった欲しいと思う。

増井教授：神聖さというのはなかなか難しいが、大事な通りであることには変わらない。道路の拡幅もあるということなので、新しい眺望景観のあり方を取り入れた景観整備としていっていただきたい。

上嶋さんは、建築家としての力の発揮の仕方も含め、重要眺望景観候補 12 件についてどう思われるか。

上嶋氏：以前、県との共同事業で大和高田のフットパスマップをつくった。その際、歩かないと分からないが、ほんの一瞬しか見えず、少しでもずれたらダメな眺望というものがいくつかあった。以前奈良まちづくりセンターで催されていた写真展でも、良い風景があった。一般の方が見る風景には良い風景がたくさんあるが、それはあまり公の場に出てこない。その風景は人には教えたくないという部分もあるのかもしれない。仕方ないのかもしれないが、そのあたりが漏れ落ちてしまっている。奈良市民であっても、日本国民であっても外国人であっても、奈良を訪れる人に、風景を評価してもらえれば良いと思う。例えば、奈良市や市の外郭団体のＨＰに風景を登録してもらい、それを様々な人が評価をするという方法などをとれば、徐々に洗練していけると思う。

三条通であれば、今後三条通全体に法的な枠をかけていくかと思うが、規制の対象にするシステムや事業を実施するシステムのなかに市民の意見を取り入れられないかと思う。特にＪＲ奈良駅前や三条通では、合意形成をしなければ前に進まないというシステムができないかと思う。

増井教授：市民のとおきの景観を大切にすること、そして、その延長として合意形成の仕組みに繋がっていかないかということであった。つまり、とおきの景観をうまく集める仕組みをつくっておくと、市民的な合意形成が必要なプロジェクトにおいてもそれをベースにしていけるという提案であったと思う。これは、眺望景観に限らない話である。

三条通を具体的にこのように景観形成していけば良いという話があった。「保全活用」と書かれているが、活用について、より良い眺望景観を形成していくということは一つの活用であると思う。他に活用ということとはどのようなイメージか。

仲谷課長：最も考えやすいのは観光への適用である。例えば、若草中学校からの眺望景観があげられているが、これはその一点だけでなく、少し離れた西安の森も視点場として含めた広い視点場を設定している。その広い視点場を利用して回遊してもらい、少年刑務所方面からの観光ルートのひとつとして利用できるのではないかと考えている。また、眺望景観を紹介することによって、まちづくりに利用してもらえるということも一つの活用の方向であると考えている。このような良い眺望があるから集まってイベントをしようということにも繋がるのが期待できる。

増井教授：眺望景観に関する情報を観光やまちづくりに役立てるということであるが、具体的に重要眺望景観に対して、どのようなコントロールや規制をかけ、整備していくことを考えているのか。

仲谷課長：No.27 の西の京の大池の景観は、13 頁の図で見ると、課題が多いが奈良らしさも高い

という眺望景観である。写真を見ていただくと、薬師寺の塔の間に大仏殿が見えている。しかし、その付近には白いビルが映り込んでいる。これは建築物のペントハウス部分が突出して見えているものであるが、もしこれがなければもっと良い眺望景観になるのではないか。具体的には、建築物の色彩やペントハウス、屋外広告物などの規制が考えられる。また、他の眺望景観では電線類の地中化なども考えられる。

増井教授：保全と活用の両方の視点からお話いただいた。具体的な規制の内容などは今後決めていかなければならないだろうが、ペントハウスなどのように、眺望景観という見方を
して、初めて様々な問題が見えてくるということがあると思う。今後検討していくな
かで、有効な手段を考えていただければと思う。

重要眺望景観候補の選定や保全活用の話について、会場から何か意見はあるか。

会場：スケール感が面白いと思う。どれだけ市民が合意できるかがポイントであるが、問題
が分かり易いスケールである。折角ここまでやっておられるので、奈良にとって眺望
が大切であるということをも共有できる人たちに分かり易く沢山訴えていければ、他の
都市にはないスケール感で、市民の合意が図れると思う、頑張ってください。

増井教授：市民や市外のサポーターを増やすことで、価値観の共有を得やすいテーマであるので、
市もこのような問題を議論する場をもっと設けていっていただきたいというご提案で
あったと思う。

最後にパネラーの方々から一言ずついただきたい。

室氏：本日は上嶋さんから良い話を聞かせていただいた。

上嶋氏：建築家は自分のやったことを誉めてもらうことが一番である。奈良市では、建築文化
賞が廃止になった。是非これを復活させていただきたい。

宮前氏：年度末までに山ほど宿題がでると思う。意見をいただければ、できる限り反映できる
よう頑張りたい。

仲谷課長：貴重な意見に感謝する。計画づくりを行政だけで進めているということにならないよ
う、様々な形で情報発信しているつもりである。今後も発信の方法を検討していかな
ければならないということを感じたところである。眺望景観に関しては、市民皆で考
え、方向性を共有していきたいと思う。

増井教授：本日の議論を総括させていただく。

前半は奈良らしい景観について議論いただいた。目に見える景観だけではなく、心で
感じる景観や情報としての景観の視点も重要であるという素案の説明があったが、こ
のあたりは皆さんも納得されたのかと思う。しかし、眺望景観を考える時に、お化粧
的なものではなく、町全体が景観としても環境としても良くなっていかなければなら
ないし、そのことが眺望景観に結びつくという指摘は重要であると思う。また、この
事業を進めているなかで「見る-見られる」の関係の難しさがあること、そして、あま
りに奈良らしさを強調しすぎるとステレオタイプ化してしまう危険性もあるというご
意見もあった。鹿のシンボルさえあれば奈良らしいということにならないように、本
質的な景観の話にしていかなければならないということである。

後半は十分に時間がとれなかったが、重要眺望景観候補について議論いただいた。重
要眺望景観候補の選び方としては、解決を必要とするような場所が選ばれていること、
奈良を代表する眺望景観が選ばれているということは理解いただけたのかと思う。し

かし、そのなかでもいくつか重要な指摘があった。奈良らしい眺望景観は皆それぞれが思っているものがあり、それを共有できる仕組みがつくれないかというご指摘もいただいた。とっておきの景観を出し合う仕組みや、平城宮跡のなかでもこの場所から見るのが良いということなどを出し合う仕組みである。それらを共有することが、次のステップとしてのまちづくりや景観のコントロールに直接役立っていくのではないかとのことである。また、眺望景観は分かり易く、ここからの景色は良い、ここにこれがあるのは良くないということは、共通の基盤で議論しやすいテーマである。いかに皆で議論するか、外からの意見をいかに取り入れるか、また、いかにサポーターをつくっていくかもこの事業のなかで考えていただきたいという意見があった。また、奈良市へのパネラー及び私からのリクエストでもあるが、眺望景観は景観だけの話ではなく、基盤となる都市計画や生業に関わると産業や農業、自然景観の保護など、広がりのあるテーマである。景観部局だけでなく総合的に取り組まなければならないという認識を行政内でも高めていただければと思う。

この講座は市民講座として続いていくものであると聞いている。眺望景観は皆で語り合えるテーマであるので是非参加いただき、奈良市の景観について共に考えていきたいと思う。

(4) 閉会

仲 谷 課 長： 本日は参加いただき、また、貴重な意見をいただき感謝する。今後、様々な議論を重ねるなかでより良い計画としていきたいと考えている。また、情報発信のひとつでもあるが、本日配布しているペンに記載されているように、奈良市ではなら・まちかど景観発掘隊というイベントも実施している。次回は11月に山の辺の道などを対象に行う予定である。眺望景観に関わらず、皆さんと話をし、接して、情報を得るなかで、我々景観課としても成長していきたいと考えている。今後とも宜しくお願いしたい。